



万博費用膨張なし崩し

20日夕方のNHKニュースを慌てて撮った写真。大阪・関西万博の会場建設費が500億円上振れして2350億円になったことを伝える。内訳は資材価格443億円、労務費84億円、予備費130億円の増額、建設費157億円の削減で500億円の増額に。なんだか数字合わせのようだが、巨額の会場建設費上ぶれは波紋を呼んでいる。



毎日新聞21日朝刊は表題の見出しを掲げ、次のように指摘する。当初は1970年大阪万博の「太陽の塔」のようなシンボリックな建物は設けず、巨大な広場を特色にしようとした。ところが、会場デザインプロデューサーを務める建築家が計画の変更を要求。20年12月に1周約2kmの「世界最大級」をうたった木造建築物「大屋根（リング）」が加わり、350億円をつぎ込むことになった。

大阪・関西万博 建設費 最大2,350億円の見直し	
▼ 資材価格	443億円
▼ 労務費	84億円
▼ 予備費	130億円
▼ 建設費削減	-157億円
計	500億円

万博協会の石毛事務総長は当初の1250億円について「愛知万博(05年)の面積当たりの会場建設費を基に計算した」と説明。個別の施設ごとに詳しい試算はしておらず、想定甘さを認めている。ところが、22年ごろに資材高騰などが顕在化しても、万博協会は工事の簡素化など抜本的な見直しには及び腰のままで甘い見直しを変えなかった。



石毛氏は「3度目はないか」との記者の質問にはさらなる上ぶれを否定し、「今回の上限を認めていただければ、その範囲内で収めるのが務め。それを超える可能性があるとは言っていない」と気色ばんだ。協会の責任を追及する声には、「どういう観点から問うているのか。協会の責任というよりも環境が変わり、与えられたミッション実現のためにはコストをかけざるを得なくなった」とかわした。

同日の産経新聞朝刊もシビアに問題を伝えている。工期が切迫し、建設作業が厳しさを増すなか、会場建設の見通しが大きく好転するかは見通せない状況だ。建設費のさらなる上ぶれを指摘する声も上がる。日本建設業連合会の宮本会長（清水建設会長）は「建設会社はお金が足りなかったから工事を受けなかったのではない」と説明。万博の準備遅れは、ゼネコン側に正確な設計図面の提供や、予算・工期の裏付けがある発注がなされていないことも要因とした。会場建設の一部を受注した中堅ゼネコンの関係者は「建設費が再び上振れる要素はいくらでもある」と話し、会場建設費のさらなる上昇もあり得るとの見方を示した。

写真は350億円の巨費をかけて作られる大屋根。会場建設費の上ぶれが問題になるなかで、大屋根の規模縮小などは検討されたのか。万博協会などに問い合わせよう。

(2023年10月23日)